

唐と東アジア

今回学ぶこと

隋唐帝国の繁栄は日本の国づくりにも大きな影響を与えた。日本は遣隋使や遣唐使を派遣して中国の文化を摂取し、それによって自国の制度を整備し、仏教を発展させた。さらに中国との交流をつうじて遠くインドや西アジアの文化にも接するようになった。シルクロードと結ばれた唐の都の長安は、国際都市として栄え、多くの外国の使節や商人を呼びよせた。こうした隋唐帝国の繁栄や長安の国際性はどのようにして生まれたのか学んでいこう。

調べておこう・覚えておこう

- 中国史上唯一の女帝となった^{そくてんぶごう}則天武後の生涯とその時代の唐について調べてみよう。
- 安史の乱を境とした前半期の唐と後半期の唐の違いについて調べてみよう。またその転換点となった安史の乱とそれにまつわる^{ようきひ}楊貴妃の物語について調べてみよう。
- 唐に渡った^{くわかい}空海と^{さいしやう}最澄が仏教を学んだ場所について調べてみよう。

隋の南北統一

遊牧文化の影響の濃い北朝から生まれた^{ずい}隋は、589年に陳を亡ぼして中国を統一し、呉・東晋・南朝のもとで開発された豊かな江南の資源を獲得した。このように隋の中国統一は、長い分裂の時代に北方で発達した軍事力と南方で発達した経済力を統合するものであった。そして、この両者を結ぶために築かれたのが大運河である。

大運河の役割は江南の物資を都の長安や北方の戦線に運ぶことにあった。文帝は仏教を振興し、律令を整備するなどして国内の安定に努めたが、煬帝は性急^{こうくり}に高句麗遠征をおこない、人々の支持を失った。618年に隋にかわって唐が興るが、隋の制度の多くは唐へと受けつがれた。日本は607年に^{おののいもこ}小野妹子を遣隋使として派遣し、翌年には隋の使者が日本を訪れた。日本は^{くだら}百済や^{べくちえ}新羅、高句麗とも交流をもちながら、大陸の文化を導入していった。

唐帝国の誕生

隋末の混乱をうけて初め唐の国力は振るわず、北方の突厥の圧迫を受けたが、第二代皇帝の太宗の時代には、刑法である律と行政法である令を整備するなどして国内の安定に努め、北方や西方での戦争に勝って領土を拡大した。さらに太宗は部族の有力者らを地方の長官に任命して間接支配をおこなう羈縻^{きび}支配をおこなって勢力範囲を拡大した。唐は北朝から受けついで軍事制度としての府兵制、土地制度としての均田制、租税制度としての租庸調制をおこない、官僚制度や地方行政制度を高度に体系化した。また儒教・道教とならんで仏教にも厚く保護を加えた。

7世紀後半には高句麗を滅ぼすなどして唐としての最大領域に達したが、7世紀の終わりごろには周辺諸民族の活動が活発になり、国内の政治も混乱した。8世紀前半の玄宗の時代に再び政治が安定して繁栄を迎え、長安では皇族や貴族を中心にぜいたくで華やかな文化が生まれた。しかし、755年に起こった安史の乱以後、地方では節度使と呼ばれる地方長官が各地の支配に大きな権限をもつようになった。9世紀の中ごろには多くの寺院があった長安を中心に仏教の弾圧がおこなわれ、外来の宗教であるマニ教・ゾロアスター教・ネストリウス派キリスト教にも打撃が加えられた。こうして国際都市としての長安の輝きが失われていくいっぽうで、海上交易で栄える沿海部の都市にはペルシアやアラビアの商人が来航し、新たな国際都市として発展していった。

長安の繁栄と遣唐使

日本の遣唐使の数え方には諸説あるが、7世紀前半から9世紀前半にかけて15回ほどの遣唐使が派遣された。7世紀の東アジアは高句麗・新羅・百済の三国の争いに唐や日本が関与する動乱の時代であり、遣唐使の目的も政治的な交渉が主であった。唐は百済と高句麗を滅ぼした後、今度は新羅との戦争を始めたが、西方の吐蕃^{とばん}や北方の突厥との戦争が激しくなったため、新羅との関係を修復し、7世紀末に興った渤海^{ほっかい}とも冊封関係を築いた。このため東アジアは安定の時代に入った。日本もこのころ国号を「日本」とし、701年に大宝律令^{たいほうりつりょう}を制定して本格的な唐の制度の導入に努めるようになった。以降は遣唐使を定期的に派遣するようになったが、9世紀に入ると、民間交易が盛んになって遣唐使の意義は薄れ、唐が崩壊しつつあった9世紀末には廃止された。